

第8回地域福祉推進のための講演会 開催記録

1 概要

(1) 日 時 平成25年11月30日(土) 午後1時00分から午後5時まで

(2) 場 所 長久手市文化の家 森のホール

(3) 内 容

- ・基調講演「共生のまちづくり」

講 師 堀田 力氏(公益財団法人さわやか福祉財団理事長)

- ・シンポジウム「ずっと地域で暮らしたい！」

コーディネーター 堀田 力 氏

パネリスト 朝川 知昭 氏(厚生労働省老健局振興課長)

岩本 裕子 氏(県営長久手第2住宅自治会長)

村居 多美子氏(NPO法人介護サービスさくら理事長)

吉田 一平 氏(長久手市長)

- ・交流会

(4) 参加者 370名

2 開会 あいさつ(横倉実行委員長)

この地域福祉推進のための講演会は、昨年から2か月に1回程度、市と社協の主催で開催されていますが、「参加者の顔触れが毎回同じだよね。」「もっと多くの人に参加してほしいよね。」ということをもみんなで話し合い、今回の実行委員会が立ち上がりました。

実行委員の構成メンバーとしては、社協の職員、市役所の職員、その他民生委員児童委員、市民公募の方、さわやか福祉財団の方、私は福祉事業者として参加しました。

実行委員会で意見を出し合い、託児や小学生向けの認知症サポーター講座等、いろんな人に参加してもらうための仕掛けをしています。運営もそれぞれができることをすることとし、社協は子育てや認知症サポーター講座のボランティアを集め、会場案内は「文化の家フレンズ」の皆さん、受付の案内は、民生委員児童委員さんが来てくださっています。

皆さんができることを少しずつ持ち寄って、今日が開催されています。みんなができることを少しずつ出せる、優しさを少しずつ出せるまちになるといいなと思っています。

私は1年前、家族に悲しい出来事が起きましたが、近所のおばさんに支えられました。買い物にも行けないだろうと差し入れや子どもたちにクリスマスケーキを買ってきてくださりました。そんな優しさをもらうと、今度、皆さんにも優しさを配りたいなと思える。そんな優しさを出し合えるまちになったらいいなと思って、今日の講演会を楽しみにしています。

3 基調講演「共生のまちづくり」 講師 堀田 力氏

私からは、どのようにしてみんなで助け合う温かい地域社会をつくっていくのかについて、私の考え方をプレゼンテーションさせていただきます。基調講演の後には、素晴らしい4名のパネリストからどのようにして共生のまちづくりを実現するかについて、いろんな考え方や事例の提示があると思います。その結果を、その後の交流会において、おいしいお菓子もあうそうですから、みんなで話し合い、気持ちを一緒にしていくことができれば嬉しいと思っています。

まず、先ほどか宣伝されておりますこの青とピンクのパンフレットを使って、皆さん方のお気持ちを聞かせていただきたいと思います。自分がどんな状態になっても、できる限りは住み慣れた自分の家で最期を迎えたい、そこで暮らしていきたいと感じておられる方は、ピンクをこちらに向けて上げていただけますでしょうか。

はい、全部ピンクですね。上がっていない方が若干名、数えるぐらいですね。この2、3年、全国で同じ質問をしています、どこも同じです。やっぱり住み慣れたところで暮らしたい。本音はそういう方がほとんどです。

さて、今、上げていただいた方で、自分の家族のこととか、いろんなサービス、実際の身の回りのことを考えて、現実もそうできるよと思っておられる方は、もう一度ピンクを上げてください。それは難しいという方は、上げないでください。

あまり上がりませんね。1割くらいでしょうか、全国あちこちでお伺いしている感じからすると多い方だと思います。長久手市は楽観的な方が多いのか、そうではなくて、吉田市長の行政がいいから大丈夫だと思って上げていただいたと思います。もちろん全体から言えば、上がったのは2割未満ですから、8割ぐらいの方は、「本当はそうしたいけれど無理だよな」と思っておられることが分かりました。それでも2割ぐらいは「大丈夫だよ」と思っている点は、本当に頼もしいですね。全国のレベルからすれば、随分進んでいると思います。

そういうことで、実は、最期まで自宅で暮らしたい、自分の馴染んだ場所で、心安らかに最期まで暮らせるというのは、本音で言えば当たり前のことです。だから、そうできる仕組みをしっかりと作らなくてはいけない。行政、医者、看護師、保健師、へ

ヘルパー、介護福祉士、介護に従事しておられる方々、家族、近所の方々、ボランティア、何といても本人、みんなで力を合わせてそうできるようにするというのが、みんなで幸せに暮らせる社会をつくるために大切なことで、当たり前のことですよね。そのために、自分たちができることは、頑張りましょうというのが、今日のフォーラムの狙いですが、最期まで暮らすためには、お医者さんも必要なときには来ていただかなくてはなりません。例えば胃瘻をしていて何か具合がおかしくなった時には、夜中でも来ていただかなくてははいけない。ヘルパーさんも、転んでしまって起きられないよというときには、夜中でも来ていただかなければいけないでしょう。しっかりそういうサービスができないと、私たちの願いはかなえられないわけです。

そういうしっかりした仕組みをつくるのは、最終的にはみんなの責任としても、制度をつくる厚生労働省、行政、それを実際に行う市町村に第一義的な責任があります。そして、私たちの願いに沿えるようなサービスができよう、介護保険制度を変えたいというのが、ずっとその制度を担当している方々の願いでもあります。

一方で、それに反対するいろんな声もあります。自宅で最後まで暮らされるようになったら、施設や病院を運営できなくなるという意見です。しかし、そんなにすぐにはできるはずもなく、可能な限りそのように自宅で最期まで暮らせるような制度になるよう、いろんな方が知恵を出し、法律もできて、実際に実践されております。

つまり、深夜でも「今、転んじゃって起きられないよ」と助けを求めると助けに来てくれるようなサービスです。われわれは、24時間サービスとか、定期巡回・随時対応型サービスとか、いろんな言い方をしています。法律になると、「定期巡回・随時対応型訪問介護看護」という長い難しい名前になっていますが、今日は分かりやすく「24時間サービス」と言っておきますが、そういうサービスが現にあるということをご存知の方、ピンクを上げていただけますか。

素晴らしい、半分は上がっています。失礼な質問でした。2年前から始まっていますし、その前から試行されています。

もう1つお聞きします。同じサービスが長久手市にもあるとご存じの方、上げていただけますか。あまり上がらないですね。さっき上げられた方は、全国のどこかにはあるというのはご存じだけれど、長久手にあることをご存じないのでしょうか。

長久手市でも2つの事業者がそのようなサービスを行っています。そのうち1事業者が、来年1月から本格実施されるそうです。このサービスをしっかり受ければ、仮に家族がおられなくても、ご自宅で過ごせますよね。24時間いつでも必要なときに来てもらえるわけですから。

定時巡回というのは、24時間の全てがサービスの対象です。人によっては、朝起きたときの着替え、歯磨きのお手伝いをして、それから朝食の準備をして、トイレを済ませる。それから、昼のトイレ、昼食の準備、午後3時頃にもう一度トイレ、夕方に来て夕食の準備、お風呂の手伝い、お休みになるときにトイレ、着替えをして、夜中に1回トイレに来てほしい等、時間を決めて、必要な時にサービスに来てくれる。現在の介護保険制度では、1日1回というサービスが普通です。それから考えると、1日に何回も来てくれて、しかも、必要なときには電話をすればいつでも来てもらえる。夢のような話ですが、これが現実にも全国各地で行われ始めています。

お金がかかりすぎるとか、そんな人手はいない、夜中に行くなんていう仕事は難しい、あるいは家族がそんな頻繁に人が来るのは煩わしいとか、いろんな意見がありました。実際にやってみたら、そんなに夜中に何回も行くということはない。平均すれば、週に2回か3回程度とっていたよりもずっと少なかったんです。

昼間にいろいろとお世話が行き届いているから、夜になるとゆっくりお休みになるということで、想像していたよりもずっと呼び出し回数が少ない。しかも、電話がかかってきても行かなくても済むことが多い。一番多いのが、「お薬、飲んだのかな。」という相談です。これは電話で、確認してもらえば、行かなくても済みます。

実際に、それ程大変でないことが分かってきていますので、このサービスがこれから広がっていくと思われれます。介護保険制度ができて10年が経過し、いろいろな反対もあったけれども、みんなが幸せになるために、特に人生最後の一番大事な時期をその人らしく過ごせるように、制度が変わってきています。

ただし、実際に聞いてみると、「いい制度ができたけれど、やっぱり施設に入るよ。」という方がいくらかいます。一番住み慣れた地域で、自分らしく暮らせる制度ができたのに、どうして地域で暮らさないのかと考えると、家族もいなくなって1人になったときに、体のお世話に来てもらえても、ずっと1人でいるなんて寂しい。それなら、いろんな人が入っている施設のほうがいいと考える方が結構おられます。

この「寂しい」という気持ちは、自分の家で好きなようにしたいというのと同じように、よく分かりますよね。年がいけばいくほど、「寂しさ」というのは身にこたえます。体が不自由なのに、じっと1人でいるなんて嫌だという気持ちは、本当に分かります。「共生」、みんなで助け合うというのは、そこなんですね。

確かに、体のお世話をしてくれる方は来てくださるようになった。でも、人は体だけではない。「心」があります。知り合いの人、会いたい人と会って、しゃべらなくてもいい、一緒にいるだけでも嬉しい。

私も、父を看取り、母を看取りましたが、最後のほうは話ができなくなっていました。昼間も寝ていますから、夜に目が覚める。暗くなってくると、不安、死ぬことに対する恐怖をひしひしと感じる。そういうときに、その手をすっと握って、しばらく握っていると、安心するのでしょうか、眠りについてくれる。そういう寂しさ、不安を支える。これが共生の一番大切なところです。

介護保険のヘルパーさんが生活の基本、食事とかは支えるにしても、心を支えるのは、心ある仲間しかありません。家族の一番大切な役割であり、家族がおられない方についても、ご近所、ボランティアの仲間が温かい心を持っています。その気持ちを持って、最期の最も重要な時期に付き添い、手を握り、話をする。地域で最期まで暮らすには、そういう活動をしっかりみんな提供することが必要になってきます。そのことを、まず、最初に確認しておきたいと思います。

実際にそういう活動をしている仲間がいて、いろんな活動をしていますので、ひとつ紹介しましょう。

自宅に1人でお住まいの方で、自分では体が動かせない方がいて、そこへ仲間のボランティアが訪ねていました。だから、1人で体を動かせなくても、そのおばあちゃん、安心できます。しかし、世話をしてもらえることは嬉しいのですが、どんな状態になっても、世話をされるだけではなく、自分のできることで役に立ちたいという願いを皆さん持っています。だから、彼女の場合は、編み物が上手なので、寝たきりだけれど、「編み物を教えましょう。」と言い出されて、体の調子のいいとき、編み物を教えていただくことになりました。

ボランティアの仲間の中で、編み物が全然できない男性グループから編み物を習いに行くことになりまして、リーダーが指定したのが、あるおじいちゃんです。そのおばあちゃんが、鶴田浩二のファンだったのですが、ボランティアの男性陣の中で、無理やり探せば鶴田浩二に似ていないと言えないこともないのがそのおじいちゃんです。渋々、習い始めて1カ月ぐらいでお亡くなりになったそうですが、おばあちゃんも最後に人の役に立って、自分の編み物の腕をちゃんと伝授してきたという気持ちなんではないでしょうか。教えている間は生き生きとして、体は起き上がれないのですが、本当に顔色が良く、安心してお亡くなりになったとのことでした。

ただ、残念ながら、技術はあまり継承されていなくて、このおじいちゃんは全然進歩しませんでした。どちらも認知症が入っていて、昨日どこまで教えたか、翌日になったら忘れてしまうので、毎日最初から始める。残念ながら技術の継承はできなかったのですが、この最期の大事な時間、ただ世話になるだけではなく、自分が好きなこ

とをできる住み慣れた家で、自分を生かしてそういう技術を伝えて亡くなった。本当に素晴らしい最期をお送りになったと思います。

こういう例はたくさんあります。ホスピスで、亡くなる直前まで、ベレー帽をかぶって墨絵をしっかりと教えていたおじいちゃんの例もあります。やはり、いくつになっても自分のいいところを生かしたいという思いが強いんですね。それを支えるボランティア活動が大切です。歌をずっと歌ってもらっていた（聴いていた）ボランティアもいます。それから、パソコンを使って、もう口はきけなくなったけれど、首を動かして短歌を作り続け、インターネットで弟子をつくっておられた方もおられます。

今まで助け合いというのは、この最期の時期になるとあまり行われていなかった。

ただ、これからは24時間のサービスがしっかりできて、地域で最期まで暮らしていただける。そうすると、そういう助け合いも非常に重要になってくる。まずそういうことを申し上げました。

しかし、助け合いは、体が本当に不自由になる前の、体が少し不自由になりかけた段階、介護保険の要支援で必要となります。ちょっと不自由で、ちょっとした助けが必要な状態のときに、助け合いの役割は大きいですね。仲間が少し助け合えば、介護保険のサービスを受けなくても十分できることがある。それぞれ不自由なところはあってもいいが、補い合うことに温かさがあると思います。

プロにやっていただくと安心なのですが、仲間同士で助け合っていてやっていると、心があり、お互いに楽しみながらできる。「相手にも楽しくなってほしい。」というのが助け合いの一番の特徴で、冒頭に横倉委員長が「楽しくやりましょう。」と言っていたのも、そういうことなんだと思います。

介護保険のヘルパーさんに入れてもらうお風呂、ボランティアの助け合いで入れてもらうお風呂、どちらがいいですかと聞いて、実際に一番多い答えは「両方がいい。」です。プロは、入れてもらって安心できる。助け合いで入れてもらうお風呂は、楽しい。これが大方の答えです。助け合いですから、プロの方ほど手際が良くないかもしれませんが、楽しくなってほしい、喜んでほしいという気持ちが強いのですから、お話もする。お風呂に入れてもらいながらその話、そこの気持ち、これが楽しいということですよ。

私の知人の長野の弁護士が、ボランティアで入浴サービスを始めました。市から廃棄用のバスを安く購入、改造して、訪問の入浴サービスを行う。こういうサービスを男ばかりでやっています。その弁護士と、顧問先の中小企業の社長さんとか、無理やり引っ張り込んでやっていました。彼は、仲間の中で自分が一番もてると自慢するん

ですね。どうしても、そうは思えない。客観的に容姿を考えるとおかしいと、長野まで見に行きました。

それが、確かにもてていました。一緒に回って、原因が分かりました。おばあちゃんをお風呂に入れるじゃないですか。背中を一生懸命に洗いながら、「おばあちゃんの背中、きれいだね。若いよ。」と話しかけるんです。そうすると、おばあちゃんが嬉しそうにしている。次のときも、また「おばあちゃんの背中、若いね。きれいだよ。」。全部そう言うんです。「お前、ちょっと無責任じゃないか。誰でもかれでも若いって、そんなことを言っているのか。」と言ったら、「背中なんか見やせんのためから、いいよ。」と気にも留めません。

リップサービスですけど、おばあちゃんも本当に嬉しそうなんです。おばあちゃんからすれば若いおじさんが背中を一生懸命洗って、「きれいだね」と言ってくれると、やっぱり嬉しい。本当に笑顔がほしい、喜んでほしい。だから、一生懸命やっています。なるほど、彼は助け合いの一番大事なところはやっているのだと思いました。

私は、本当の財産は自分がつくり出した人の笑顔だと言っているのですが、これは、何人ものお亡くなりになる方と話して実感したのですが、亡くなる1週間ぐらい前に自分も最期だなと感じるときがあるんですね。そのときに不安になって、自分は生きてきてよかったのだろうか、あるいは死んだらどこへ行くのだろうかという問いが、結構出てきます。もう話すのもつらくなっているような、中には酸素マスクをしながら、一生懸命そういうことを言う友達もいました。

その時に、あなたはこんな素晴らしいことをしたから本当によかったよねと言ってあげる。例えば、「あなたは助け合いをやっていて、一人暮らしのあのおばあちゃんとよく一緒に夕食をして、あのおばあちゃんも本当にあなたと会えて楽しかったと喜んでおられたじゃないですか。あのおばあちゃん、天国で待っておられますよ。」、という話をすると、本当に安心して、それ以上そういうことを聞かれなくなります。

私のおやじの場合もそういう問いがありました。おやじは英語の教師でしたが、戦後、英語教育が導入されて、その英語の教育に付いていけない近所の子どもたちを集めて、一生懸命英語を教えていました。もちろん、月謝は払えないわけで、今の言葉でいえばボランティアで何とか学校が好きになってほしいと、一生懸命に教えていた。

そのときに習っていた近所の仲間たちが、成長した後もそのことを感謝してくれていて、お中元、お歳暮をおやじのところに送ってきてくれました。「あのときに教えてもらって学校にきちんと行けた。だから今日がある。」と感謝していただいていることが、嬉しいですよ。だから、そのことをおやじに話しました。

おやじも本当に安心した顔になって、それ以後はそういう問いもなく、安らかに亡くなりました。

今、介護保険の中の要支援の方々に対する生活サービスは市町村に委ねましょうという動きになって、2年後にはそういうことになります。そうなると、比較的軽い方の生活は市町村で支えることになっていくでしょう。その時に、ただお金で雇って生活のサービスをするというのも必要ですが、できれば支え合い、助け合える範囲のことはみんなで助け合ったほうが、助けられるほうも嬉しいし、助けるほうも楽しいし、行政もその分お金を使わなくて済みます。そうなれば、介護保険料もそんなに上がらなくて済むということですから、みんなにとっていいわけですね。

ですから、今後、助け合いの仕組みのあり方が問われる。たくさんそういう活動がある地域ほど、温かい、住んでいて嬉しい地域ということになります。そういう活動もいろいろ広がりつつあり、この後のシンポジウムでも、自治会でやっておられる素晴らしい話が出るでしょう。

全国でもいろいろな事例がありますが、東京でいえば立川市の大山団地が有名です。佐藤さんという、元気なリーダーがおられます。この元気な女性が自治会長になって、今では、団地住民全員が自治会に加入しています。強制もしませんが、この団地は転入してこられたら、歓迎会を開かれます。特にご近所の仲間が歓迎会をして、よくここへ来てくれました、ここはこういうところでこんなに助け合いがありますよと、いろいろ説明します。新しい土地に引っ越して来た不安を解消してくれる。

この自治会は、市から清掃業務やいろんな事業を請け負っていて、自治会自体がお金を持っている。参加している人にも、多少ですが謝礼も支払われる。だから、いろいろな助け合いの事業もできます。幼稚園の送迎、お年を召されて体が不自由になっても、いろいろ手伝ってもらえるから安心ですね。みなさんここに移ってきてよかったと感じ、自治会の年会費1万円を全員が収めています。

自治会以外にもいろんなNPOがあります。例えば家事を手伝うNPO、居場所をつくっているNPO、この後、パネリストの村居さんからも紹介があると思いますが、地域の助け合いがベースで、NPOの助け合いがあるといろいろなサービスが広がります。

そういうNPOの活動と地域の助け合いの活動がガッチリ組み合うと、相当のところまで自分たちの仲間の助け合いでやれるんですね。

やってもらおうほうも、ただやってもらっただけじゃない。自分は体が不自由になっても、自分はパソコンが得意だから、いろいろ世話になっているお礼にパソコンを習いたい

おじいちゃん、おばあちゃんに教えるからとか、子どもにこんなことを教えるからとか、不自由になってもいろいろ人のために役立つことがいっぱいあります。人はいろんな能力を持っている。そのようにして、お互いさまで自分を生かして助け合う。自分もそれが楽しい。そういう温かい地域社会が共生の社会です。

そういう社会を、長久手の皆さん方はいろいろつくってきておられますが、今度の介護保険の改正は、チャンスですね。素晴らしい市長や市の職員がおられ、環境もいいです。みんなでやるチャンスが来た、みんなでこれを広げるチャンスが来たと考えて、一緒に助け合ってやっていきたいと思います。

私からのプレゼンテーションは、まずは以上です。この後のシンポジウムでもっと話めていきますので、最後まで一緒に考えていただければ嬉しいと思います。ご清聴、どうもありがとうございました。

(休憩)

4 シンポジウム「ずっと地域で暮らしたい！」

コーディネーター 堀田 力 氏

パネリスト 朝川 知昭 氏 (厚生労働省老健局振興課長)

岩本 裕子 氏 (県営長久手第2住宅自治会長)

村居 多美子 氏 (NPO 法人介護サービスさくら理事長)

吉田 一平 氏 (長久手市長)

【堀田】このパネルディスカッションの目的は、みんなで助け合って、あったかい地域をつくり、最期まで安心して暮らせる、そういう町にしよう、そういうメッセージを出すことです。

このパネルが終わった時に「そんなこと言ったって無理だよ。この時代、助け合いなんてできないでしょう。」と思われたのでは、このパネルは大失敗ということになります。お帰りになりますときに、「うん、そうよね。」、「やれることはやろうよ。」という気持ちになっていただければ成功ということになります。何とかパネルが成功しますように努めさせていただきます。よろしくご協力ください。

では早速ですが、介護保険あるいは助け合い、地域支援等の全体状況をつかんでいただくために、現在、制度改正のため日夜ご苦労されております浅川課長さんにお話しさせていただきます。日本の介護制度の責任を両肩に背負っておられる張本人でございます。鬼のような顔をしておられる方ではなくて、本当に優しい笑顔のほっとする

課長さんからのお話、15分ほどでお聞かせいただければと思います。よろしく願いいたします。

【朝川】 みなさんこんにちは、厚生労働省の朝川と申します。まず、私どもがこの介護の分野を中心に、今後どのようなサービスを提供していかなければいけないか、それを一言で言うと、ここに書いてあるように地域包括ケアシステムを全国各地につくってことであると考えています。

まず、社会の変化を2つほどご紹介して話の導入にしたいと思いますが、1つは認知症の高齢者数です。今、全国に高齢者、65歳以上の人口は3,000万人ちょっとです。その中で、要介護認定を受けている認知症の方は、約300万人です。

しかし、今年の春に認知症、高齢者の数の新しい推計が発表されていて、実は要介護認定を受けていないけれども、認知症になっている方が約160万人いるということで、合計で約450万人と推計されています。また、その推計では、まだ認知症になっていないけれども、予備軍の人が更に約400万人いて、合計で約800万人が認知症もしくは予備軍ということも推計されています。

ここから示唆されることは、認知症対策の施策として重要になっているのは、重くなる前の早い段階でご本人様、家族様に認知症のことをご理解いただき、専門的なサービスにつなげる必要がある人はつなげるということです。国の政策もそういう方向に向いておりますが、3,000万人の中の800万人とかなりの割合ですし、ここに家族を足していきますと、かなりの数になります。つまり、認知症のことを考えるということは、もうすでに地域全体で考えていかなければいけない課題になっているということだと思います。

もう1つ、押さえておきたいのが、家族、世帯の構成です。高齢者のみ世帯、あるいは高齢夫婦のみという世帯が非常に増えているということです。全世帯の中の4分の1になっており、今後、益々増加していくことが見込まれます。

ここから示唆されることは、まず、介護サービスについてです。堀田先生のご講演でもお話がありましたが、今の日本の介護の現状として、要介護4、5という方が在宅で暮らしを継続するというのは、そんなに簡単ではないという状況です。家族の支えや介護サービスがあって、初めて在宅での生活が継続できます。

ところが、家族の支えが期待できない世帯が多くなってきているということは、そのことを十分に考慮しないと、これから高齢者、要介護高齢者を支えるサービス提供体制というのは不十分であるということです。最期まで地域で暮らし続けたいという思いを実現していくためには介護サービスのあり方を変えていく必要があるということが1つです。

あともう1つは、これも堀田先生のお話にありましたが、実は介護サービスだけで高齢者の生活が支えられているわけではなく、いろいろな困りごとがあった時に、独り暮らしの高齢者の方は、介護サービス以外の支えを必要とするということです。そこをいかに地域で支えていけるかが重要な課題になってくると考えています。

そこで、地域包括ケアシステムが必要ということになります。考え方としては、重度な要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを最期まで継続できる、そういう地域をつくりましょうという概念です。その際、考慮すべき要素が「住まい」、「医療」、「介護」、「予防」、「生活支援」の5つです。

重要なのは、この地域包括ケアシステムには全国標準的な形があるわけではなく、地域で考えていくべき課題であるということです。中心は市町村ですが、やはり市町村だけで考えていても地域の形は作れません。介護関係者、地域住民、関係するみんなと一緒に考えて地域づくりをしていく、そこにポイントがあるかと思っています。

政策的には、地域づくりを進めるに際して、いろいろなツールを用意することが国の課題だと思っていますが、いくつか重要なポイントがあります。今日は3つほど申し上げますが、1つ目は『医療と介護の連携』です。これから医療サービスは、入院しても早く在宅に戻そうという動きになってきます。高齢者の増加に伴い、救急搬送される患者も増えており、高度救急の医療機関では、いかに早くベッドを空けて次の患者を受け入れるかが課題となっています。

そうすると、在宅、地域では、医療を必要とする人がたくさん地域に戻ってくることになり、医療を必要とする要介護をいかに支えていけるような地域づくりができるか、そこが1つ重要なポイントです。それが1つ目です。

2つ目は『介護』です。私も冒頭に申し上げましたが、独り暮らし高齢者、認知症の高齢者が増えると、従来型の訪問介護、デイサービス等を増やす必要がありますが、それだけでは支えきれません。基本的には毎日サービスが入り、かつ1日の生活リズムに応じて複数回対応するサービスが地域にないと、最後まで在宅で暮らし続ける困難です。そういうサービスを増やす必要があると思っています。

専門的にも、24時間の定期巡回というサービスが用意されています。堀田先生がおっしゃっていましたが、実際やってみると、言われているほど事業者にとって大変なサービスではないということが分かってきています。通いのデイサービスを基本としながら訪問も行う、小規模多機能型居宅介護というサービスです。もう7、8年前から始まっていますが、このサービスも重要です。このサービスは、やはり重度の方になると訪問する頻度を増やしていかなければいけない、実際に行っている方々からはそのような声をお聞きします。

在宅で生活を継続するには、比較的軽度の方は通いサービス中心でも対応可能と思いますが、重度の方は、できるだけ家庭に訪問できる、しかも場合によっては夜間も対応可能なサービスを増やす必要があると考えています。これが、地域包括ケアを考える上で、今重要になっているポイントの2つ目です。

3つ目が今日のメインテーマである『生活支援』です。今、全国各地で増えているサービス付き高齢者向け住宅というのがあります。これは2年前に制度化された住宅ですが、ここに入居されている方の入居理由で一番多いのは、「独り暮らしが不安になったため。」という方が8割です。もし、もう少し安心して暮らせる地域になれば、あえて持ち家ながら入居する人を減らせるのではないかと思います。

こちらは、独り暮らし高齢者が生活で困っていることですが、上から順番に読み上げていきますと、電球の交換、自治会活動、掃除、買い物、散歩、食事、通院、ごみ出し、薬を飲む等が挙がってきます。これらは家族がいれば、ほとんどが困らないこととす。ところが独り暮らし高齢者、あるいは高齢夫婦のみ世帯になると、ちょっとしたことで困ってしまう。そこで、サービス付き高齢者向け住宅のような施設に入ろうかという話になってしまうので、ここをどのようにフォローするかが重要です。これを介護サービスだけでフォローできるものかという点と難しいので、やはり地域づくりで期待される場所が多分にあるということを示唆していると思います。

一方で、60歳以上の方の社会参加の状況を示したデータがありますが、この10年間、社会参加は増えています。当然かもしれませんが、増えているのは健康、スポーツ、趣味、地域行事等、本人にとって楽しい活動です。一方で高齢者の支援は、大体5、6%という状況で、政策的な後押しが必要だと思っています。

考え方として、1つは生活支援と言われる、サロン、見守り、外出支援、買い物支援のような困りごとに対応していくようなサービスを地域で増やしていかなければいけない。あともう1つ60代、70代の方は、ほとんど元気な方が多いので、そういう高齢者が介護の分野に限らず、地域に社会参加できる、そういう環境を意識的につくっていく必要があるのではないかと思います。

できれば、そのような社会参加の中で、一つの活動として支援を必要としている高齢者を支える側になっていただき、そういう地域社会をつくっていく必要があると考えています。そののちを市町村中心にバックアップを強化していただき、それを国も、財政的にも制度的にも支援していきたいと考えています。

最後になりますが、要支援者へのサービスのあり方を少し制度的に見直そうということをお提案しております。この方向性は、介護度の軽い方は十分残存能力が高く、

単なるサービスの受け手になるではなく、地域に参加し、少しでも自分の役割が果たせるようなあり方に見直していこうという根本的な発想があります。ただ、今すでにデイサービス、ホームヘルプサービスを利用されている方がいますので、サービスの継続性には配慮しながら、訪問介護と通所介護を国が定型的に定めるようなサービスだけを介護保険から給付をするのではなくて、市町村にいろいろな形の訪問型、通所型のサービスを考えていただく必要があると考えています。

ここではサービスと言っていますが、体操教室とかサロンのような住民参加の場をたくさん作っていただく、そういう形に要支援者のサービスのあり方を見直してもらうため、制度的にも後押できる方法を、現在、考えている最中でございます。非常に駆け足でございますが、後から補足いたしますので、まずは以上でございます。

【堀田】 国の事実上の最高責任者が来て、短い時間でたくさんの説明をしていただきました。せっかくですから、皆さん方のご意見をちょっと伺いたいと思うのですが。今、浅川課長がご説明になった方向に介護や医療などを進めることに賛成の方はピンク、を上げていただけますか。ああ、しっかり賛成、上がっておりますね。ありがとうございます。半分弱かな。いや結構、多いと思います。

反対だよという方は青を上げていただけますか。1名上がっていますね、大変素晴らしい、その勇気に賛辞を表したいと思います。ありがとうございます。

よく分からないという方は、手を挙げていただけますか。はい、賛成と同じぐらいの数ですね。はい、分かりました。勇気をもって挙げていただきました1名の反対の方含めまして、素晴らしい反応ですよ。

地域包括ケアというのが、言ってみれば決め手とのことでした。念のために朝川さん、地域包括ケアってなんですかと聞かれたときに、分かりやすく短く答えると、どういうご説明をされているのですか。

【朝川】 本当に一言ということになりますと、要介護状態になっても地域で暮らし続けられるサービス提供体制、地域づくりをしていくということです。

【堀田】 ありがとうございます。最後まで自宅で暮らせる、そういうサービスを提供することなんですね。今日のパネルディスカッションのテーマそのものです。今年の夏に社会保障制度のあり方を考える国民会議がありまして、この地域包括ケアについての指針が出ていたと思います。これは日本全体が進む方向として出ておりますので、地域包括ケアを進める指針について簡潔にお話しいただけますか。

【朝川】地域包括ケアの要素は多岐に渡っておりまして、最後まで地域で住み続けられるには、いくつかを組み合わさらないといけないということです。1つ目は、『医療』です。医療からの流れを受け止められる地域をつくることが提言されています。それも病院という機関だけで考えるのではなくて、やはり地域で医療のことも考えていくというのが1つです。

2つ目は、『介護』のあり方をもう少し強化しようと。24時間、毎日、重度でも対応できるようなサービスをつくらうということ。

3つ目は、『コミュニティの形成』です。それを今日、私は地域づくり、あるいは生活支援という言葉で置き換えて表現しています。

【堀田】地域包括ケアを進めるのに、各市町村で介護保険事業計画を策定することになりますが、26年度から全国の各市町村の計画の中に、この地域包括ケアをしっかりと取り入れた計画にしてほしいということですね。

【朝川】そうです。今、介護保険制度では3年に一度、市町村が介護保険事業計画を策定していますが、これまでの介護保険事業計画に加えて、単なる3年後の見通しだけではなく、2025年に向けた中長期的な見通しも併せて盛り込むこととなります。

その際、どちらかという都道府県行政になっている在宅医療のことを一緒に考えるような計画にさせていただくことになっています。

【堀田】地域包括ケアの実現に向けて、全国市町村がしっかり計画立てて取り組むという方向になっているのですが、それを受けられます吉田市長さん、そのような国の動きも受けて、長久手市民のために、どのように行政を進めようとしているのか。特に地域での支えの点に重心を置きながらご説明いただけますでしょうか。

【吉田】長久手市は5万人の町ですが、今、約800人の認知症の方がおみえになります。割合では、1.6%ぐらいです。日本全国の場合は1億3,000万人に450万人なので3.5%です。長久手市は、ずいぶんまだ若いまちなので、非常に少ないです。しかし、今年になりまして、認知症だけではないのですが、孤立死された方が4人ありまして、ついこの間もう1人発見されました。この小さな町でも5人の孤立死の方が出られた。

もう1つは、この2、3週間の間に、認知症の80歳過ぎの方が、お二人徘徊されて、町中をあげてお探ししました。幸いお一人は安城、もう一人も池下で見つかりました。とても若い町ですが、実はもう既にそういう問題が起きています。

実は一つ一つ、一人一人の問題がたくさんあります。本市には、愛知医科大学があり、多くのお医者さんがおられますので、連携を取れる仕組みがきるか試験的に始めています。また、在宅のいろいろなサービスをするいろいろな業者さんもこの町にはたくさんありますが、皆さん方は、そのことをあまり知らない。その方々とどう連携していくかも、併せて今考えようとしています。

私どもの町は、先人の努力によりとてもいい町にさせていただき、全国で住みやすさ6位と言われています。しかし、介護の問題とか、もう少し踏み込んで在宅で最後まで暮らせるという町をつくるには、行政だけの力では、どうしても難しいです。従って、昨年からは地域福祉計画や生涯学習基本構想、地域共生ステーション等の取組みを役所主導ではなく、皆さんと一緒に悩んだり、苦しんだりして進めていく試みをしています。

これからも、地域福祉計画の策定に皆さんと一緒に取り組むため、これから小学区ごとに地域の方に集まっていただき、地域のネットワークづくりをしたいと考えています。また、地域におられる皆さん方を人材という失礼ですが、皆さん方が、「これだ」と思う人を探し出すため、インタビュー形式でのアンケート調査によっていろいろな人に出ていく取組も始めます。

そんなことで、これからのまちづくりは、役所だけでなく、住民の皆さんと一緒につくってもらおう。そのために、地域のみなさんに役所の各課の仕事の1つをお願いし、ボランティアだけでなく、仕事としてやってもらいたい。その報酬は、お金にするのかポイント制にするのか等、相談しながらやって、最終的には皆さん方に役割を持ってもらいたいと考えています。役所だけに任せずに、皆さん方が「いつも必要とされると。行くところがあるんだ。」と感じられるようになればと考えております。

【堀田】 皆さん方と一緒にまちをつくっていきたいというお話でした。ポイント制とおっしゃいましたが、市民の方々もやれるところはやってもらいたい、ボランティアだけどポイント制にして、市民にも参加してほしいと、こういうご趣旨ですか。

【吉田】 ご存じの方があるか分かりませんが、山口県に「夢のみずうみ村」という施設があります。その「夢のみずうみ村」構想を全国各地で紹介してみえる藤原さんという方と市職員で勉強会を開催しました。

【堀田】「夢のみずうみ村」では、少し体のご不自由な方々も、それぞれ自分ができることがある、そういうことをしたらポイントがもらえます。そのポイントが地域通貨として施設でサービス利用できる。サービスを受けようとするなら、何か自分の能力を生かして稼ぎましょうという制度です。本当にみなさんに参加してもらい、自分を生かしてもらいたいというお話でした。

さて、みんなで参加して暮らしやすい自分を生かせる町をつくっていこうという市長さんの夢が語られました。しかし、市長さん一人が言っても実現はしません。やはり市職員の方々が、自分たちもやるぞと思っていないと進みません。そこで、会場に担当の部長、課長の方はおみえでしょうか。部長さんにお聞きしますが、市長の言っている方向でやるぞと思っていれば、ピンクを上げてください。

(拍手)

【堀田】しっかりとピンクが示されて、会場から拍手をいただきました。市長さんの素晴らしい方針、みんなで実行されるということになると思います。

行政としては、やる気がある。国も支援したいと言っている。皆さんも半数の方が、「その方向いいぞ。」と、おしゃっています。でも、そんなこと市民ができるのかというのが重要ですよ。やっている人がいます。

例えば地域では、こんな活動がありますという素晴らしい事例です。岩本さん、自治会の会長として、どんなことをされているのかご紹介いただけますか。

【岩本】富士浦にある県営長久手第2住宅自治会の会長の岩本です。

私は平成23年から役員として自治会運営に携わっており、会長は2年目です。来年もまた会長を務めさせていただく予定です。

まず、自治会で始めたことが、自主防犯パトロール隊です。これは近隣や住宅内の防犯のためですが、実はごみ拾いのためのパトロール隊です。住宅内のごみがひどくて、自治会でやろうと決めて発足しました。これは今も継続しております。

また、私どもの住宅は若い方が多く高齢者は比較的少なく、約430人の入居者がいますが、65歳以上が35名、内70歳以上が23名、独り暮らしのおばあちゃんは10名みえます。その方々から、「何かお話がしたいわ。」という声があり、月に一度の茶話会を集会所始めまして、これも継続しております。

平成24年に会長になりまして、東南海地震の対策に自主防災組織を結成しました。

一応、組織として確立させており、メンバーは毎年変わる組長ですが、毎年替わらない専任の防災リーダーを募集し、私を含め3人が専任リーダーとして運営する考えです。

昨年、私どもの自治会では、0歳から小学校6年生までの子どもが85名いますが、子ども会の役員のみならず手がなく、入会金も高い等の理由から、昨年解散してしまいました。今年は、自治会の運営で子ども会の行事等を引き続き行っています。

行事には、毎月の廃品回収があり、子どもがお菓子をもらっていましたが、どうしても住民のみなさんの理解が得られなくて、廃品回収をやめることになりました。それを何とか継続するために、廃品回収の代わりに月1度の全住民による住宅内の清掃の際に「子どもお掃除隊」を作りました。子どもが出席するとスタンプがもらえて、6回（6カ月）継続して参加すると500円の図書券がもらえます。おかげで子どもたちは、毎月、清掃に参加しています。お掃除を欠席される方もいて、手薄になった場所に子どもたちがお手伝いに行ってもらい、今年度は継続してやっています。

これまで防災への取組みに力が入っていませんでしたが、安否確認マグネットシートを作り、各家庭に配布しました。地震等の災害で避難する際にドアの表に貼ることにより安否確認できるようにし、防災訓練でも実施しました。避難用の車いすも購入しました。これまでの防災訓練は大人だけでしたが、子ども会もなくなりましたので、子ども防災訓練を年2回実施することにしました。子どもたちは、マグネットシートや車椅子を使って、安否確認、けが人の救助をゲーム感覚で実施しております。

防災倉庫に入居者全員の備蓄品をストックする場所がないので、今年度より各家庭に備蓄用の飲料水を配布し、期限までに飲んでいただき、また新たなものを配布する防災の備蓄を始めました。

これも今年度からですが、地域包括センターから話がありまして、私どもの集会所で2か月に1度、健康相談や健康体操、個別相談などに来ていただいています。茶話会等で事前にお手紙を配っていて、みなさん楽しみにして来ていただいています。

来年度も私が会長を務める予定ですので、これらの取組みを継続していき、住宅内だけではなく近隣の方にも参加してもらえそうな催しにしたいなと思っています。

【堀田】素晴らしい活動の紹介をありがとうございます。その素晴らしい活動をどう広げるか、この後の討論の中で進めたいと思いますが岩本さんは、楽しいからなのか、他にやることがないからやっているのか。どちらですか。

【岩本】私どもの住宅では、新しく入居した方が順に役員をすることになっており、私も2年目で役員をとつめました。少し改革できないかと取り組んでいる内に、だんだん楽しくなりました。

【堀田】楽しい、素晴らしいことです。団地で出会う方は、「あの人と付き合うと掃除をさせられるぞ。」「子どもを引っ張り出されるぞ。」と言って、避けられたりしませんか。それとも、「いつもやってくれてありがとう。一緒にやりましょう。」という反応ですか。自治会の皆さん方の岩本に対する反応は、どんな感じでしょうか。

【岩本】私は自己満足でやっています。ごみを拾っているのを見て、「どうして、そんなごみを拾うの？」と言う方がいますが、「とりあえず、私が拾わなきゃ駄目なんじゃない？」とってしまう性格なんです。

やはり自分たちの住むところは、当然きれいなほうがいいし、誰もやらなかったら「私がやればいいんじゃない？」という考えで、そんなに何も考えていません。

【堀田】なるほど、率先して行動される素晴らしい方ですね。きっと皆さんもそう感じていると思います。ありがとうございました。

(拍手)

それでは、お待たせしました。この講演会の開催にもご尽力いただいた村居さん。NPO でいろんな活動をしておられます。今は地域の活動でしたが、今度は NPO という 1 つの志を持った方々が集まって活動されている素晴らしい事例の紹介です。

【村居】私が取り組んでいる活動のほんの一部ですが、ご紹介したいと思います。

「一人一人に役割と居場所、混ざって暮らす、プロの住民を目指す。」、これは、26 年前に「地域の助け合い」というのを立ち上げたときのパンフレットです。

これは、中日新聞に掲載された記事ですが、この建物は築 70 年で、くぎ一本使っていません。2 階では、昔、蚕を飼っていました。実家にいるような気分を感じてもらうため、改修もトイレと風呂の最低限にしました。段差はもちろんありますが、高齢者にとっては、段差は生活リハビリです。自宅へ帰ってからも、どのように生活するかを学んでいただく場所です。

この写真は、近所のお宅から、「柿がたくさんなったけれど、高くて取れないので手伝ってほしい。」と頼まれて、収穫しているところです。渋柿なので、こういうふうにはじめで吊して、お正月用に干し柿を作りました。タマネギなどの野菜も、地域の人たちが持ってきてくれます。

これは梅ですが、梅酒や梅干しを作っています。このおばあちゃんたちにとっては、作り方を教えることで、吉田市長が言われる「立つ瀬」があります。ここの皆さんは

本当に忙しくて、若い人たちに梅干しや梅酒の漬け方を教えてくれています。こんなに素晴らしいものができてきます。

この写真の子は、「さくら」で働いている方のお子さんで、生後2カ月からここで働いてくれています。私たちは、預かっているという気持ちはありません。1歳2か月になりましたが、立派に役割を果たしています。逆に、高齢者の方たちにも役割があります。この子が怪我をしないように、目配り、気配りをしてくれています。

この資料を作るに当たってケアマネジャーと話をしていましたが、10年前に要支援になった方が、「さくら」でいまだに要支援という方が何人もいらっしゃるということを知りました。これはすごいことだなと思います。一人一人にちゃんと役割があると、本当に生き生きするのだと感じます。

これは、親子広場とって、0歳から3歳までの小さな子どもたちの居場所です。この大家さんは60歳で定年退職し、今後はグローバルな子どもを育てなくてはこのことで、自宅を開放してくれました。そこの庭で取れたジャガイモ、タマネギ、サツマイモなどをお味噌汁にして、100円で皆さんに飲んでいただき、その100円が東北の支援に送られています。既に、若い人たちが30~40万円の寄付をしています。

このお母さんたちの中には、英語の話せる方がいます。その人たちに、英会話を教えていただいています。一人一人の役割があって、一人一人の持っている能力を生かす場にもなっています。

この場所は、昼間はデイサービスで使っていますが、夜は空いているので、月に1回「居酒屋ぼちぼち横丁」ということで、近隣の皆さんに開放しています。一級建築士、医者、看護師、ヘルパー、いろいろな人たちが集まってきます。その中で、地域にこんなものがある、あんな人がいる等どんどんと分かってきます。それがすごく大事なことではないのかなと思います。

最後になりますが、私は、一番大事なことはプロの住民を育てることだと思います。ここにいらっしゃる方は、みなさんがプロの住民です。例えば、どこのお店の何々がおいしい、どこの病院のお医者さんが話をちゃんと聞いてくれる、そういう情報を多くの人たちと共有する方がプロの住民だと、私は思っております。

地域の課題を知ったら、まず、自らが動き出すこと。これは26年間の実感ですが、呼び掛けだけでは人は集まりません。介護保険で全はカバーできませんので、無いものは自分たちで作ります。岩本さんが実践されているように次から次へと作り出していく。そういうことがとても大事ではないのかなと思います。

支え合いの地域づくりというのは、「あなたが支えるのはあなた自身であり、あなたが支えなければあなたは支えられない。」と思います。日々暮らすこの町で私に何

ができるかを考え、ちょっとした時間と気持ちをプレゼントしてはどうでしょうか。そのちょっとしたがたくさんになって、いつか私の「困ったな」を助けてくれる。誰のためでもなく、私を支えているのはこの私自身だと、私は思っています。

【堀田】ありがとうございます。高齢者の方と子どもたちが交わっている素敵な写真がたくさんありました。それぞれのいいところを活かして、どちらも本当にいい笑顔です。子どもの写真以外は、全部ものを食べている写真、飲んでいる写真でしたが、やはり、みんなで集まって食べたり飲んだりすると、本当に和むんでしょうね。

【村居】みんなで混ざって暮らすことが、すごく大事だなと思いました。最近、子どもが家に帰っても、80歳、90歳のおばあちゃんは家にいません。でも、こういう居場所に来ると、おばあちゃんがいる。そういったおばあちゃんたちが大好きで、すぐに寄っていくというのは、小さな子どもも知らず知らずのうちに、お互いに支え合うということを学んでくれているのかなと思います。

【堀田】1歳2カ月の子供も、「うん、私はいいボランティアをしたよ。おばあちゃんを助けたよ。」と思っているかもしれませんね。すてきな交流でした。

また、そういう活動をどう広めるかですが、市長さん、お二方の活動を聞いておられて、どう思われますか。

【吉田】とにかく自分でやってみようということが、本当に素晴らしいと思います。初めての試みは失敗したり、遠回りしたり、苦しいこともあると思いますが、行政もその活動を形にする過程を応援していきたいと思っています。

【堀田】しっかりと支えていきたいということですね。では、どういう支え方がいいのかを考えたいと思いますが、まず、地域活動である岩本さんの自治会活動におばあちゃんたちも参加したり、いろんな活動が広がってきたのは、岩本さんが会長になられてからの話ですか。

【岩本】なってからだと思います。

【堀田】なぜ、岩本さんはそのような自治会、地域にしたいと思い、行動をしようと思われたのか。どのようにして広めたいと思われたのでしょうか。

【岩本】最初に役員になった時に会計を担当し、会計の帳面を見て、ちょっと無駄があるかなと感じました。

例えば、住宅の植栽剪定に年間 50 万を業者に支払っていました。私としては、改善策としてシルバーさんをお願いすればと思いましたが、過去に事例もなかったもので、取りあえず自分で剪定ばさみを購入し、自分で剪定してみようと思いました。

暑い時期を避け、10月から12月の3か月で住宅周辺の低木の剪定を行いました。最後は、自分で自画自賛するほど上手になりました。その様子を見ていた方が多かったです。話し掛けてくださる方、お茶を差し入れしてくれる方等がみえました。

私もまだ入居して間がありませんでしたが、その3か月間で住民の方と少し密接な関係ができました。結果として、私自身も自信ができて、翌年に会長になってからは、改善の提案ができましたし、そんなに反対もありませんでした。

【堀田】自治会費で業者に委託していた剪定費を節約するために始めたということですが、なぜ、その時に仲間を誘わず、お一人でまず始めたのですか。

【岩本】結構、1人でやるのが好きなんです。どうしても年内に完了したいと思っていたので、誰かを誘うとその人のペースに合わせなくてはいけい時もありますが、一人で作業すれば融通が利くというのもありました。

【堀田】その志を行動に移しているのは素晴らしいのです。しかし、市全域にこの活動を広めようと思うと難しいですね。岩本さんのように、みんなのために自分一人で頑張ろうという方は、なかなかいないと思いますが、市長さん、地域のこのような活動を特別な人に頼らずに広めていく方法はないのでしょうか。

【吉田】本当に素晴らしいことだと思います。私も全国いろんな所を見て回っていますが、岩本さんや村居さんみたいな人がたくさんおられます。

冒頭に言ったように、本市はとても豊かな町です。ですから、住民の皆さんにいろんな仕事をしてもらおうと思っていますが、「何だ、役所の仕事を全部市民にやらせるのか。」と怒る人もおられます。

嫌われても、怒られてもいいけれど、全く無料をお願いするわけでもなく、やっていただけるまで待つということが必要かと思っています。とても職員も苦しいと思いますが、勇気を持ってやってみて、どこまでできるのかだと思います。

とにかく、まずは理解してもらえよう、市役所の職員も町の中を回って、岩本さんのような仕事をサポートしていきたいと思っています。

【堀田】皆さんのお知恵、お力を借りたいというお話です。さて、このような活動を広めることに頑張っておられた村居さんにお伺いします。NPOの広め方は、ちょっと違うと思いますが、地域活動をうまく広めるについて、アイデアはありますか。

【村居】私たちNPOは、地域にこういうものがあつたらいいな、こういうものがないと困るということを自分たちがやることによって、仲間に広めていきます。

やはりその地域をよくしたいと思ったら、いろんな人たちに声を掛けるということがとても大事なことだと思います。

その中で、私たちは、考えながら行動も進めてしまっていますが、予算がないから出来ないではなく、無償ボランティアにお願いする等の工夫をします。また、少額ですが有償という形であれば、小さい子供がいても1時間働けますという方もいますので、そういった人たちに来ていただけるようになりました。

現在、私どもでは270人ほどの方が働いております。高齢の70歳以上の方もいますし、学生さんもいます。いろんな年代の方たちが働いてくださるのは、自分に合った時間で、自分の好きな動き方をしていただけるということがあります。

【堀田】自分たちの志で、「まちをきれいにする。」、「子どもたちに幸せになってもらう。」、「防災の訓練をする。」等、できる範囲で行動を呼び掛けていくことが大切だという、出発点のお話でした。

京都の春日学区では、地震等があつた時に真っ先に助けに行く「第1ランク」の支援をしなくてはいけない方、大丈夫か気を付けて見ようという「第2ランク」の方を印した地図ができています。個人情報保護法の時代に、なかなかそういう地図は作れないのですが、町内の皆さんが、お互いに助け合おうということで、一軒一軒回って作られたそうです。素晴らしいですね。

この地図の作成を呼びかけたのは、当時70代の散髪屋さんです。そこは京都御所の東側にある地区ですが、ある時火事が発生して、消防車も道が狭くて入れず、おばあさんが焼け死んでしまった。そういう悲惨な出来事があって、いざというときには、自分たちで助け合わないと心配でならないという気持ちから、防災マップを作って、今でも2年に1回更新して、配っておられます。

しかし、いざというときだけではなくて、普段から買い物に行けずに困っているおばあちゃんがいるなら、やれる者同士で助け合おうよと、そういう助け合いにだんだん発展しています。そうすると、警察も消防も「あなた方がこれだけやってくれるなら。」と協力し、社協も「社協がやるべきことを皆さんにやってもらっていて申し訳ない。私たちも何か協力します。」となるわけです。

そして、町の助け合いの仕組みが出来上がり、春日学区で廃校になった春日小学校を利用して、普段から話し合いをする居場所をつくることになり、行政も学校の空き場所を提供し、地域の助け合いがずっと発展してきている。

そういう発展の仕方もありますが、市長さん、いかがですか。

【吉田】 今お話しいただきましたマップづくりも、9月の講演会に住民福祉総合研究所の木原さんをお招きして、皆さん方と一緒にワークショップを体験しました。そのときの資料を本日配布しました。その講演会で私は衝撃を受けました。私たちの今の常識で助け合いマップを作ったら、全然うまくいかなかったんです。

資料「あなたの『おつき合い』の流儀は？」には、10個の質問があります。例えば「自分や自分の家族のことは隠しておきたい。」等です。多くの方は、10の内8個位該当します。けれども、それでは全く助け合いマップができなかったんです。

65歳ぐらいになってから、自分の常識を変えないといけない。村居さんが「誰のためでもない。自分を支えているのはこの私自身。」と言われましたが、私たちも、木原さんにまた来ていただいて、自治会、小学校単位で自分たちの支え合いマップの作り方の練習をしてほしいと考えています。

【堀田】 岩本さん、吉田市長はああおっしゃっていますが、いかがですか。

【岩本】 私木原先生の講演会に参加しました。その時に、「おせっかいな人、大歓迎。」と先生に言われ勇気づけられました。「じゃあ、私、いいのかな。」とほっとしました。必ず近所には、「お隣、今日はカーテンが開いているわ。」等と気にされる方がいますが、そういう人ってすごく大事だと改めて感じました。私も「あそこ、ちょっと今日はカーテンが開くのが遅い。」とか思っちゃうので、恥ずかしいかなと思っていましたが、今も実行しています。

【堀田】 今、お話に出ている木原さんは、地域のいろんな力をどう引き出すかということとずっと研究、実践していて、全国各地でそういう活動を支援している素晴らしい

リーダーです。彼によると、地域には必ず「世話焼きさん」がいて、この世話焼きさんを見つけ出して、いかに世話焼きを支援していくかということです。そうすると、困っている人を放っておけないわけですから、自由に動かれて、「みんなであの人を助けようよ。」とか、そういう動きにつながっていくという仕組みです。

もう少し組織的に進める方法として、神奈川県平塚市では、行政が「自分たちの地域の困り事を解決したいと思う方は集まりませんか。」と呼びかけて、小学校区単位の話し合いの場を設けています。そこで、地域の課題を話し合い、その町内で自分たちは何ができるか、行政には何をしてもらおうかを話し合う会です。

そうすると、最初の日々の2時間も話し合えば、誰がどのように困っていて、誰が何をできる、市にはこういうことをお願いしたい等の意見が出ます。助け合い、見守り、いろんな声が出て、自分たちでやれることはやりましょう、できないことは行政につなげましょうという形で助け合いが進んでいます。

この事例は、私どもが支援していますが、いろんな形がありますので、皆さんに一番合う方法がいいですね。村居さん。

【村居】 最初の一步がなかなか出ないのですが、一步出ることによって仲間が生まれ、時間を重ねることによって、自分の地域に何が不足しているのかが見えるようになってきます。そうすると、自分で「こういうものが欲しいな。」と言えるようになってきます。だから、誰かに声を掛けていくということが、本当に大事だなと思います。

3人が集まれば、形ができてきます。そこで、仕組みを作っていないと、長続きしません。ですから、みんなで声を掛け合って、時間を重ねてください。そうすると、本当にいろんなものが見えてきます。だから、私も26年続けてきたんです。

【堀田】 26年間、よく続けていますよね。若々しく、気分よく飛び回っておられる、さわやか福祉財団の世話焼きさんです。

そういう活動を広めるのには、いろんな方式があります。東北、中国地方では、地域協議会のような従来の自治会とは違う地域組織をつくり、そこにお金を出して、どういった助け合いをするのかを決めてもらっています。例えば、東北ですと、自宅から道路までの雪かきを、この地域の協議会で助け合おうということです。他にもいろいろな助け合いがありますが、そういう活動に対して、最初に予算を決めて何百万円というお金を渡し、使い方は任せるという方法もあります。

ただ、お金の出し方はなかなか難しく、あまり出しすぎるとやる気がなくなったり、お金のためにやっている訳ではないとお叱りを受けたり、もっと欲しいと言われ

たりする。吉田市長は、市長になる前からこの分野でずっと活動されていますが、行政の支援の仕方、お金の出し方については、どうしてお考えですか。

【吉田】本市は、面積 20 平方キロ、人口 5 万人の町で、これまで町全体で事業を進めてきました。しかし、実際にまちに出てみると、6 つある小学校区で仕組みも、成り立ちも全部違います。

ですから、できたら校区単位に、若しくはもう少し小さい単位に分けて、事業を考えていただく。その地域に必要な事業を計画、申請してもらい、市役所が事業費を支払うような地方分権、地域内分権というイメージです。

今日の話を知りたりして、「よし、われらはこうやってやろうか。」とお考えになる方もいると思いますので、事業費の要望がたくさん出てくればと思っています。

【堀田】行政がお金を含めてどのように支援し、助け合いを実践するのかです。今度、要支援者に対する生活支援が市町村の役割になりますが、ただお金で人を雇って解決するだけでなく、温かい助け合いを活かす方法について考え、皆さんの意見をうまく集めながら、いい仕組みが出来上がっていくといいと思いますね。

朝川さん、ここまでお聞きになっていて、いかがでしょうか。

【朝川】地域包括ケアをつくるためには、そのような地域づくりが必要だと認識しており、とても関心のある事項です。今日ご発表いただいている岩本さんや村居さんのような取り組みは、全国を見渡すと結構あるのですが、全ての地域にあるわけではない。

システムをつくる側としては、全ての地域に普遍化する責務を負っているのです、すごく関心を持って勉強していますが、これだという方法があるわけではないと認識しています。

比較的共通しているのは、その地域に核になる人がいることで、その核になる人をいかに探すか、つくるといふところを支援できるシステムづくりができないかと考えています。

行政主導を進めると、人と人のつながりによる活動の広がりや芽を摘んでしまう可能性があるため、NPO のような活動を大事にしながら、なかなか NPO に頼り切れない地域については、そういう核になる人を意識的に行政の側から探すか、つくり出す、そういうことが必要ではないかなと思っています。

【堀田】行政として、自発的な活動が広がるように、地域の仕掛け人のような方を探し出し、育てることが出来る方策を考えているという大変頼もしいお話だったと思います。

残り時間が、5分となりました。ここまで、地域で助け合う、そしてNPO等とも上手に組み合わせていくという話でした。また、村居さんが有償ボランティアの可能性をお話しいただきました。吉田市長はポイント制に触れられましたが、地域通貨という助け合いもあります。村居さん、この辺りについて説明いただけませんか。

【村居】NPOは、人と人とのつながりと言いましたけれども、地域にとって、みんながつながっていく、つながりながら課題を行政に伝えていく必要があると思います。

良いことだとみんなに伝えて、それを行政に伝えることが必要だと思います。

【堀田】ありがとうございます。最後の一言を今おっしゃったんですが、その前に、あのお三方に最後のメッセージをいただきたいと思います。

世話焼きさんを見つける、協議会を開く、地域の会を開く等、いくつかの方法をご紹介しました。その他に有償ボランティアが、お掃除をしたり、食事を手伝ったり、軽い介助等の助け合いをする。全く無料だと、頼む方も頼みづらい。そのような助け合いを行っている団体は、全国にたくさんあります。1980年代から日本でも現れて、それが広がってきて、今、介護保険ができて少し伸びが止まりましたが、また今度、要支援者の生活支援を頼むならば、この仕組みも十分活用できると思います。

それから、地域通貨という方法です。子どもからお年寄りまで、助け合いをやりようという方がみんなが集まって、買い物、犬の散歩等の助け合いに対して、自分たちの作ったお金で支払い、地域で循環する。「ダラー」、「ピーナッツ」等、全国にいろんな名前の地域通貨があります。これは被災地でも、現在、行われています。

最後に他の方にもメッセージを、いただきたいと思います。まず、岩本さん。

【岩本】私は、今までやってきたことをこれからも継続していきます。別に、自己満足でいいじゃないか、と思っています。

【堀田】はい、自己満足でいいじゃないかと。ありがとうございます。吉田さん、いかがでしょうか。

【吉田】今日、私はこのオレンジ色のベストを着てきました。背中には「まちづくり、まずは笑顔でこんにちは」と書いてあります。これでとにかく、小さな町ですから、

「おはよう」でも「こんにちは」でもいいので、みんながあいさつして、とにかく「ちょっと助けて。」と言えるようなまちになって欲しいと考えています。なかなか賛成が得られませんが、少しずつでもいいから協力してもらえたらと思います。

【堀田】ありがとうございます。助け合いは挨拶からですね。まずつながり、これが一番基本です。ありがとうございました。朝川さん、いかがですか。

【朝川】今日は、こういうシンポジウムの時間を共有させていただいて、私自身も大変啓発されました。

全国に、このような取り組みが広まることが私どもの仕事なので、今日の勉強の成果をしっかりと全国に広まるように伝えていきたいと思います。

【堀田】ありがとうございます。広まると思います。

これで締めでございます。皆さん方に最後の1問。このパネルディスカッションは成功でしたでしょうか。やろうというお気持ちを持っていただけましたでしょうか。そう思われる方は、ピンクを上げてください。上がっていない方は、探しておられるのか、どっちかだと思います（笑）。

全員が、あげていただいたと思います。ありがとうございました。これも皆さん方のおかげです。パネリストの皆さん方、本当にありがとうございました。

5 交流会「さあ、想いを語ろう！」

(以上)